
20

早川 真治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

20

【Zコード】

N8873B

【作者名】

早川 真治

【あらすじ】

楽しいハズの旅行…しかし、その先で起きた事件

(前書き)

タイトルは、全く意味がありません。 詳細は、あとがきにて。

人物（和樹）（愛花）（その他は、適当に）

サクサク サクサク サクサク 暗い森を懐中電灯で照らしながら慎重にすすむ。

「なんで…なんで…俺がこんな森の中を歩かなきゃいけないんじゃ！！！」叫びがこだまする。

『あの森つて…出るんだつて…。』この一言で森の探索が決定された。

「だからってさ…余った俺は、一人かよ…！暗い森を一人…？靈なんかより獣達より…あいつらが一番怖いぞ…！」またも叫ぶ。しかし、叫んだ所で状況は、全く変わるはずもない。

古寺があり この肝試しが行われる事が予め決まっていた事の様に、ロウソクが置いてあつた。

『古寺に置いてあるロウソクを一組一本持つて帰つてくること…！』
愛花あいかが云つた。以前から一人で行くことが決められていたのか？？ハメラレタ…。奴め…ぎやふんと云わせてやりてえぜ…！

一人グチりながら歩く。

『きやああああああ』何処からか聞こえる悲鳴に皆が急いで集まる。

人が倒れている。

「和樹…」愛花が声をかけてくる。間違いない…死んでいる…懐中電灯の光で照らされた死体の顔は、恐怖で歪み目を見開いた状態だった。

俺は、そつとより目を閉じてやる。

そして、死体をこのままにする訳にもいかないし警察に連絡しない訳にもいかない。俺がおぶり屋敷へ急いだ。

「なんで…！？なんで死んでしまったの！？」コレが某アーメだつたら『坊やだからさ』と云うが実際に起きてしまった事には、誰も答えられずうつ向くばかりだった。

「警察に連絡したよ…でも…霧で今夜は、来られないって…」皆一分一秒でも早くこの状況から抜け出したいのに窓の外は、1メートル先も見えない様な霧が立ち込めていた。

それは、まるでコロから外に逃げられないようにするかのように…。「取り敢えず…明日の昼には、来れそうだし、部屋に戻つて休みましょう」愛花が疲れきつた皆に云い部屋に戻つていく。

「俺も…休む」そう言い残し部屋へ戻つた。

『ぐあああああ…！』地を引き裂くような叫び声が屋敷に響く。コレで一人目…。部屋の灯りをつけると壁や床には、血痕が飛び散り布団は、赤く染まつていった。皆何も云えない。森に入つた罰なんか…呪いなのか…。ただ死を待つしか出来ないのか。

「犯人は…誰だ…」俺がようやく口に出来た言葉がこれだ。

二人も死んだら一人でいるのは、危険すぎる。愛花がそう云つて居間に皆を集合させた。皆 恐怖で何も喋らない。

バチン 突然電気が消え暗闇になる。皆が慌てる。

バチン 電気がつくとそこには、また…一人。こんなに簡単に…。

「くそつ…くそおおおつ…！」壁を殴りつける。

「和樹…誰も助ける事は、出来なかつたの…暗闇の中じや何も見えないんだから…」慰めてくれるが愛花だつて相当辛いはずだ。何せ人が三人も死んで霧のせいでの敷からば、出られない。誰でも辛い。いつ殺されるかわからない恐怖でおかしくなりそうになる。

三人が寝て一人が起きているというものを15分でロー テーション

を組んだ。

「それじゃあ俺は、愛花の次だから30分後だな…」皆 疲労困憊なのですぐ眠りについた。

「……」

「！」

「きやああああ！！」その叫び声で目を覚ました。すると辺りに何とも云えない臭いが漂っている。そして、愛花がぺたんと尻餅をついていた。

「どうし！？」わかつていた。臭いで大体。床や皆の衣服に飛び散った血。首を切られ。もう一人は、顔を潰されて…。

「誰かがコロシティール…。私達は、寝ていた…と云うことは…外部から私達以外の誰かが殺つている…」愛花の声が震えていた。

時間は、もう朝の5時。随分長い間寝ていたようだ。警察も後少しで来るだろう。

「和樹：外に逃げよう…！」霧がかかっていて周りが見づらい。しかし、犯人も同じ。私達は、外に飛び出し走った。そして、和樹とはぐれてしまった。でも…霧がかかってるから…平気だよね…？？自分に云い聞かせながら周りを見る。少しづつ薄れているがまだ…。

愛花とはぐれてしまった…。早く探し出さなければ…！焦りながら探す。

ザツザツザツ 「愛花ーー！」影と和樹の声が聞こえる。良かつた…。「和樹ーー」私が返事する。

「愛花…」「和樹…」お互の顔がわかる位まで近付いた。あれ…？？なんか…。「かず」ドガツ。愛花の額から血が流れれる。和樹が不気味に笑っている。

「あはははははははーー」和樹の笑い声を聞きながら少しづつ意

意識が薄れていく。そして最後に「良かつた…間に合つた…」と言葉を聞いた所で意識がなくなつた。

(後書き)

いつも通り書き急ぐ 支離滅裂 意味不明の流れですがホラーなのでコレでよしとしましょう。しかし、もつと深く（詳しく）書いた方がいいですねー。（わかつているが出来ないwww）さて…まえがきに書きました題に意味がないってのは、題が思い付かなかつた…それだけです。あと「コレ三パターンの中の一つなのです。『警察が来る』と『一階から逃げ出す愛花…しかし、下には罠がありそれで…』」つてのがありましたがーまあ一番楽で意味がわからぬものにしましたー。では、また会いましょう。早川眞治でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8873b/>

20

2010年10月19日14時16分発行